別紙１

# 長野南高校設立経緯補足

1. 「第１章　長野県長野南高等学校の創立」三（以下「創立」と略）にあるように当時各地で起こった公立高校新設運動が「**地方自治体の首長を先頭**に、公費で行った公立高校新設運動であった」のが通常であったにもかかわらず長野南高校の設立運動においては、**更北区長会長が新設期成同盟会の会長**であるところに、**地域の切実さがにじみ出ている点が重要である。**
2. よって、地域住民よりカンパを募り、配布資料を作成したり、陳情をするためのバス手配を行った。住民運動そのものであるということ。
3. また「創立」一下段で「犀南地区は高校の偏在と交通渋滞のため公立高校の進学は、厳しい条件におかれ、中学浪人も他地区に比し多く出た」文字通り犀南地区の高校新設は**悲願**であった。
4. 当時（昭和５０年前後）からここ犀南地区において人口が多かったこと、人口増加が著しいことは「設立」から明らかであり、新設高校設立の一番の理由であった。
5. 「創立」一上段で更北中学出身の高校生が言っています「犀南は、長野市中心的位置にあり、人口も多いのにどうして高校がないのだろう。高校通学では僻地だなと感じています」これは、もし松代との統合がなされれば**将来、地元中学生が必ず感想として漏らすに違いがなく、**この地に高校のないことに対する不合理さの嘆き、必然的といえる疑問である。
6. 上記の状況は今現在も変わっておらず、さらに**当時３万４千人**であった人口はいまや**５万７千人に激増し、**未だに増え続けており犀南地区の高校存在意義、価値は当時以上に上がっているといえる。

# 第一章

# 長野県長野南高等学校の創設

## 犀南地区公立普通高校新設運動

### 一　公立普通高校新設運動の背景

「高校入学当時は、家の近くの落合橋を渡って通学していましたが、車が多く、自転車道もないので、四キロほど遠くはなりますが、今は長野大橋を迂回して通学しています。それでも車の洪水の中を縫っての登下校の毎日。心身は疲れ、今日も事故なく、生きていられたなと思うことがあります。後輩のために犀南に、高校ができたらと痛切に感じています。」

「八時のバスでもよいのですが、これだと時々遅刻します。ですから七時二十分のでバスで通学しています。学校まで約十キロですが、一時間はかかります。私の住んでいる青木島よりも、距離的にはずっと遠い信濃町や小川村、新町の生徒と家を出る時間は同じです。私たちの住む犀南は、長野市の中心的位置にあり、人口も多いのにどうして高校がないのだろう。高校通学では僻地だなと感じています。」

これは昭和四十八年、現行の十二通学区制が始まった時、旧長野市内の高校に通学していた更北中学出身の高校生、二人の感想文である。

長野市犀南地区（旧更級郡川中島町、更北村）に、公立高校新設運動の起きたのは昭和四十八年であった。県教育委員会が、昭和四十八年度から、従来の四通学区制を十二通学区制に改め、第四学区になった川中島、更北両中学校を第三学区の調整区にした。同時に昭和五十年度からは、段階的に小学区制を指向した総合選抜実施の意向を公表した。これを受けて、両中学校のＰＴＡ役員を中心に、公立高校新設の要望が県教育委員会になされた。

当時、犀南地区は、恵まれた立地条件から急速に市街化が進行し、また県、市による大規模な宅地造成が行われた結果、人口が激増した。こうしたことから小、中学生の社会増、自然増が著しく、それに加えて高校進学率九十六パーセント台（犀南地区九十九パーセント）と上昇し、高校教育は国民皆学の観を呈しつつあった。前出の二人の高校生の感想文にもある通り、犀南地区は高校の偏在と、交通渋滞のため公立普通の高校進学は、厳しい条件におかれ、中学浪人も他地区に比し多く出た。従って犀南地区への公立普通高校の新設は、犀南地区、三万四千市民の悲願であったと言える。

その後公立高校新設の住民運動の母体は、三遷したが、いずれも高校新設運動は、「地域の子弟に、国民教育としての高校教育を、他地域の子弟と同じように保証させたい。」と願う犀南市民の教育行政の変革を求めるもので、その運動の理念は、「教育の機会均等、中学浪人の解消（全入）、地域に根ざした高校創り（小学区制）であった。」

### 二　市民運動の高揚と公立普通高校新設の実現

犀南地区市民参加の公立普通高校新設運動が本格的に始まるのは、昭和五十年、二百人近い参加者を集めて開かれた、川中島町公民館での第八回犀南地区教育懇談会であった。この教育懇談会に参加した父母や、教師、一般市民から犀南地区の子弟の高校進学の現状や、悩みなどが報

告され、高校新設の必要が真剣に討論された。この時の教育懇談会参加者を核に「犀南地区普通高校新設期成同盟会」が組織され、公立普通高校新設運動は、遼原の火のように犀南地区全域に広まった。そうして県議会、県教育委員会など関係当局に幾度となく請願、陳情（資料参照）をくり返す中で、現長野南高校の地に、昭和五十八年度、新設高校開校の確約を県教育委員会から得たのである。

この期の犀南地区の公立普通高校新設運動の概略を示すと左記の通りである。

◎昭和四十八年、四十九年長野市連合ＰＴＡ役員で教育要求の一環として犀南地区に公立普通高校の新設を県、市当局に陳情。

◎五十年十一月、犀南地区教育懇談会において公立高校新設が決議され、期成同盟会が発足。会長に更北区長会長の村松猪太郎氏、副会長に川中島、更北両中学のＰＴＡ前、現会長を選出し、事務局を更北中学校に置く。

◎同十二月十三日、高校新設について長野市会、県議会にそれぞれ請願、選択される

◎五十一年一月～二月、高校新設の署名とカンパ運動。

| | 署名 | カンパ |
|---|---|---|
| 更北地区 | 九、一六九人 | 二八五、一〇〇円 |
| 川中島地区 | 九、八八七人 | 三〇一、七三五円 |
| 合計 | 一九、〇五六人 | 五八六、八三五円 |

同二月、県会、県知事、県教育委員会に公立高校新設について陳情。

九月二十七日、柳原長野市長に高校新設について協力を陳情と同時に、市長と共に副知事、県教育委員会に陳情。

同十月二日、更北、川中島中学校ＰＴＡ会員を中心にバス二台に分乗し、県知事、県議会、文教委員会、県教育委員会にそれぞれ陳情する。県議会では、陳情書採択。この陳情により、県知事は、犀南地区に県立高校の新設について理解を示す。水口教育長は、遅くとも五十八年度には、新設したいと公表。五十二年度以降高校が新設されるまでは、第三、第四通学区については、学級増、募集定員増で対処する方針を示す。

◎五十二年九月十二日、市民運動として、高校新設に一定の前進が見られたことと、さらに五十八年度より一年でも早く新設高校を開校し、中学浪人を解消したいと言う犀南市民の願いもあって、「犀南地区公立高校新設期成同盟会」を発展的に解散し、長野市長を会長に推戴し、事務局を更北支所に設けた「犀南県立普通高校新設期成同盟会」にバトンが引き継がれ、以降この同盟会が、長野南高校開校に向けて、高校用地の確保、通学道路、排水問題等地元と県の間に立って調整に尽力してきた。また「長野南高等学校」の校名は、同期成同盟会が川中島、更北両中学生を対策にアンケートを求め、その結果に基づいて県教育委員会に陳情して決定したものである。

以上。

## 三　長野南高校は、犀南地区市民長年の悲願

公立高校新設運動の概略で延べたように、この犀南地区の運動は、当時各地で起こった公立高校新設運動（中野、佐久、諏訪、伊那、松塩地区等）が、地方自治体の首長を先頭に、公費で行った公立高校新設運動とは、本質的に異なるものであった。犀南の高校新設運動は、更北区長





会長の村松猪太郎氏を会長に、事務局は更北中学校におかれ、運動資金はカンパによる市民運動であった。そしてこの運動は、思想、信条、政党の枠を超えた「全人」、男女共学、小学区制、総合選抜の、いわゆる「高校三原則」実現を指向した犀南市民の教育大運動であったと言える。そして、新設運動に燃えた市民のエネルギーは、そのまま「地元の子弟は、自分たちが運動して実現させた長野南高校に」と言う開校フィーバーとなって引き継がれていったのである。

（資料）

**犀南地区に公立普通高校を早期に新設する陳情書**

陳情の趣旨

犀南地区に公立普通高校がないため、犀南地区の子供たちは、他の地区の子供たちに比べ、公立高校進学の面で困難をきたしております。そしてこのことが、この地区の子をもつ親の心を暗くし、子供たちの心を傷つけてきております。

私たちは、このような犀南地区の現状を行政によって解消していただくべく、地域住民の思想、信条を乗り越えた世論に押され、公立普通高校新設期成同盟会を組織し、旧冬一二月県会、長野市議会に対し、当地区の事情を訴え、公立普通高校新設の請願をいたしました。当局の教育に対する深いご理解により、両議会において請願は採択されましたことを地域住民一同、心から感謝いたしておりますとともに、私どもの郷土にも自分たちの子供の通学できる公立普通高校が、他地区並みにできるのだと期待もし、その実現の一日も早からんことを願い、二月県会には、地域住民二万余人の署名をもって地区の窮状を訴え陳情いたしました。それ以来六ヶ月、第三、第四通学区内では、今春よりも約百五十名ほど多い中学生が卒業しようとしております。しかし、当地区の請願、陳情に対する具体的な政策が示されぬまま中学卒業予定者の進路指導は既に始まり、該当学年の子供たちや、父母たち、地域住民を昨年度以上に不安に陥れています。

既にご承知の通り、犀南地区は市、県による大規模な宅地造成が行われ、急速に市街化し、他地区には見られない人口激増区です。こうしたことから小、中学生の自然増、社会増が著しく、それに加えて高校進学率の上昇、公立普通高校の偏在と交通渋滞などで犀南地区の子供たちは、他地区に比べ公立高校進学に著しい困難をきたし、教育行政上不当に差別されているという感情を拭いさることはできません。

郷土の未来を担う私たちの子供たちに他地区並みに公立普通高校へ進学させたい、そのために公立普通高校の新設は、犀南地区全住民の悲願であります。地方財政の厳しいおりではありますが、犀南地区の公立普通高校進学の劣悪な条件をご賢察くださいまして、一日も早く犀南地区に公立普通高校が新設されるよう格段のご高配を下さるよう次の事項について陳情いたします。

一、犀南地区に八学級、三百六十名規模以上の公立普通高校を情報教育処理センター周辺に即時新設すること。

一、昭和五十二年度新設の困難な場合は、とりあえず「情報教育処理センター」などの施設を利用し、公立高校を開校し、中学浪人を解消すること。

昭和五十一年十月二日

犀南地区公立普通高校新設期成同盟会

会長　村松猪太郎

期成同盟会専門委員　岡沢　由往